

## 中国医学と道教（Ⅶ 黄庭経と身神）

吉元昭治

道教医学の特徴として、身神の考えがある。五臓六腑を初めとしてあらゆる体の部分に、地上の宮殿を模した中に神が宿り、それぞれ異なった服装をして、職能をもっているといふのである。道教医学の解剖学、あるいは生理学、病理学ともいえよう。修道の士は、存思内観により、目的とする部位の神の名を念じ、その存在を自覚し、交流して、身体の調和をはかり、病邪の侵入を防ぎ、病気を治し、もって道教の目的とする不老長生をはかるうするもので、現在の氣功療法ともむすびつけられるものである。

このような内容をもったものに、『黄庭経』類がある。『道蔵』中に、1太上黄庭内景玉経、2太上黄庭外景玉経、3黄庭内景玉経註、4黄庭内外玉経解、5黄庭内景五臓六腑補瀉図があり、『修真十書』にも、6黄庭内景玉経註、7黄庭外景玉経註がある。『道蔵輯要』には、8太上黄庭

内景玉経、9黄庭内景経、10黄庭外景経、11太上黄庭内景玉経、12太上黄庭中景経をみる。『雲笈七籤』には、13上清黄庭内景経、14太上黄庭外景経があり、さらに『道蔵精華』に15太上黄庭内景玉経、16黄庭内景玉経註、17太上黄庭外景経、18黄庭内景経、19黄庭外景経などがみられる。

これらの教典はその内容が同一（細部には異なる処もあるが）のものと、異っているものがあり、大別して、「内景経」系と「外景経」系とがある。このうち、「内景経」系は、1、3、6、8、9、11、13、15、16、18等であるが、9、15は章の区分をもたず、18は章の名称が他と違っている。「外景経」系は、2、7、10、14、17、19等であるが、7の内容は他と異っている。4、12は別系統のもので、5は、『医方類聚』の「五臓六腑図」と同じである。

ところで、この『黄庭経』は、魏晋時代の上清派の教典でもあり、二八八年、魏夫人（魏華存）が神より授かったものとされ、『魏夫人内伝』が今日のこされている。葛洪の後にあたり、彼女は老莊思想にしたしみ、胡麻散や茯苓丸を常用し、呼吸法の修練をつみ、ついに登仙した。南嶽魏

夫人ともいわれる。一種の巫ではなかったかといわれている。

「内景経」と「外景経」の先後関係は、王明氏は、前者を先きとするが、最近の研究では後者を先きとする説もある。それは、「内景経」の方が内容が豊富で、整い、全体が七言句で統一されているからといわれ、また世伝の王羲之の書とされる『黄庭経』もあるが、その内容は必ずしも同一ではない。

身神については、『素問』『靈枢』にはなく、「靈蘭秘典論」に「心者君主之官、肺者相伝之官」とあり、「調経論」に、「心臓神、肺臓氣……とあるぐらいで、『類経』にも「陽之靈曰神、陰之靈曰鬼、……在天地則有天地之鬼神、在人物則有人物之鬼神」の記載があるが、明確な身神の考えには到っていない。

葛洪の『抱朴子』は、『黄庭経』より先行するが、道教が仏教と対抗するため、理論的武装が必要とされたときうまれたのである。その「地真篇」に、「一有姓字服色、男長九分、女長六分、或在臍下二寸四分下丹田、或在心下絳宮金闕中丹田也。或在人兩眉却行一寸為明堂、二寸為洞

房、三寸為上丹田也。此乃是道家所重、世世歌血、口伝其性命也」とあり、『黄庭経』とよく処は同じものもある。

しかし、身神について、古くのべているのは、『太平経』であろう。そこには、「五藏神能報二十四時氣、五行神且來救助之。萬疾愈」「肝神去、出遊不時還、目無明也。心神去不在、其脣青白也。肺神不在、其鼻不通也。腎神去、其耳聾也。脾神去不在、令人口不知甘也。頭神去不在、令人胸冥也。腹神去不在、令人腹中央甚不調、無所能化也。四肢神去、令人不能自移也。」「天地或使神持負藥而告、子之得而服之、後世不知窮也。」「四時五行之氣來入人腹中、為人五藏精、……此四時五行精神、入為五藏神」「青帝出遊、肝氣為其無病、肝神精出見東方之類、赤神來遊、心為無病、心神出見、候迎赤衣玉女來、賜人奇方、是大効也。」「其神吏患之可愈百病」「神長二尺五寸、隨五行五藏服飾」などとするされている。存思内観により神を念じれば、神または神の使いは天より降下し、時には薬をおったりして、体内に入ることもあり、こうして諸病を愈すのであるという。五行説とも関係がふかく、五藏神という身神観が確立されている。

『黄庭内景經』にもられた、諸身神の具体的なことについて、発表時に行うが、このなかには、身神の名称、字、部位、職能までがうたわれ(第七、八章)、頭部九宮(泥丸宮など)さらに三部、八景、二十四神説という複雑なものにと進んでゆく。

(順天堂大学(浦安)・産婦人科)

## 『本草和名』所引の古医学文献

真 柳 誠

現存する日本最古の本草書『本草和名』は、言うまでもなく本草学・国語学・字書学等の歴史研究上に不可欠の文献である。とりわけ本書所引医薬文献の大多数はすでに逸伝しているため、中国中世以前の医薬文献とその日本への伝入状況を把握する上で本書は『医心方』『日本国見在書目録』『倭名類聚鈔』と同等の価値を有している。しかしながら本書所引医薬文献の全体に言及した報告はかつてなく、さらに現行の多紀元簡校刊本とその影印本は校刊時の所改と誤刻が多く、調査研究の底本に必ずしも適当ではない。

演者らは最近、江戸幕府紅葉山文庫旧蔵の原本を影写した森立之旧蔵本を台北故宫博物院にて親見し、そのマイクロフィルムを入手した。そこで当書を底本に引用書名・人名を調査し、各々に文献学的検討を加えた。よってその概